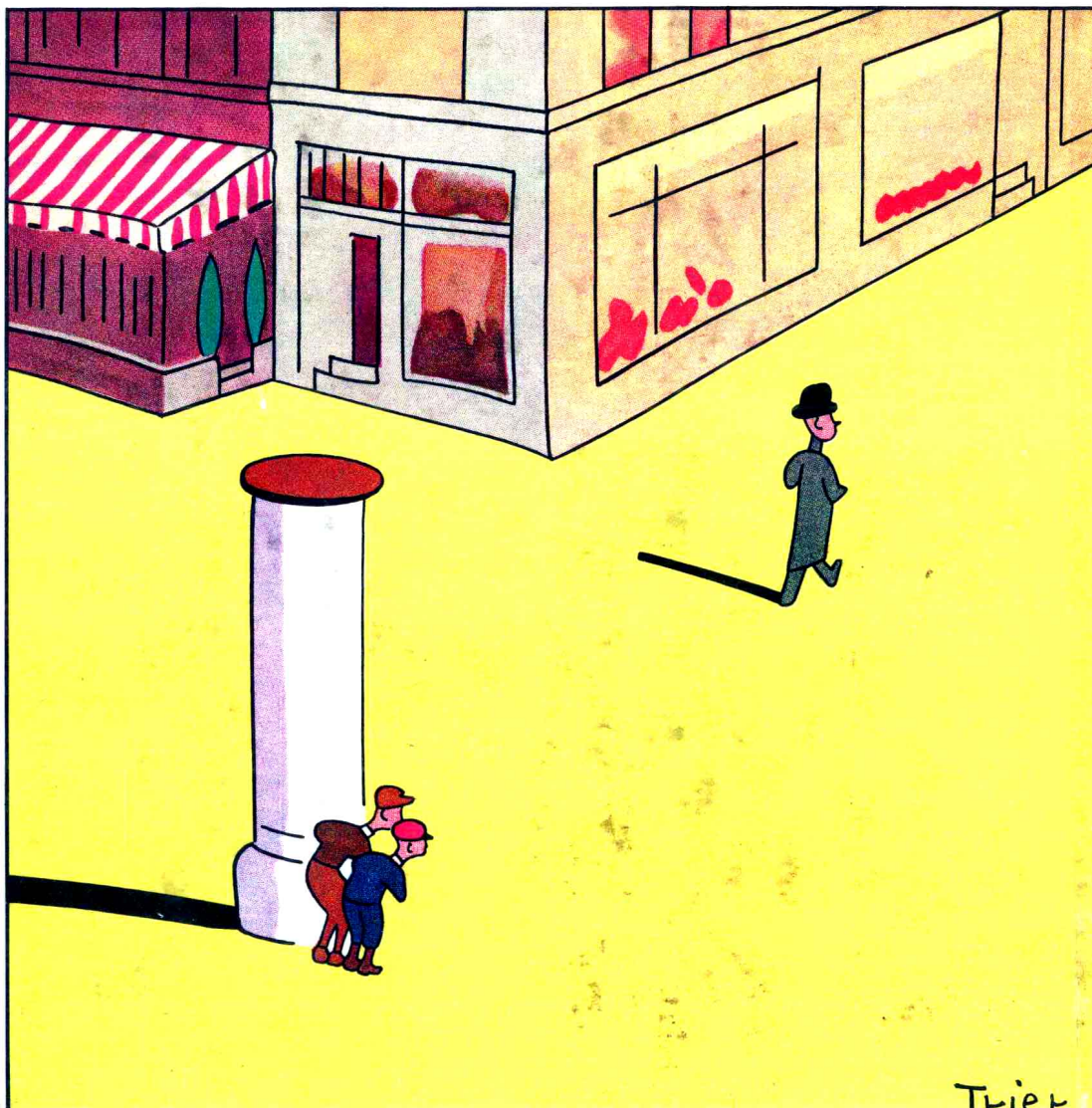


エーリヒ・ケストナー 高橋健二訳

エーミールと探偵たち



Trier

ケストナー、エーリヒ

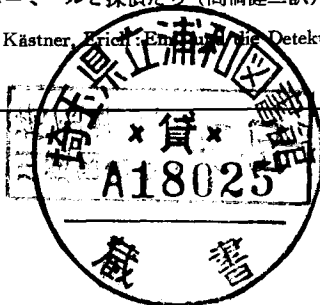
943 ケストナー少年文学全集 1

岩波書店 昭37 (1962)

212 p 21 cm 小学3・4年～中学

内容：エーミールと探偵たち (高橋健二訳)

(参考) Kästner, Erich: Emil und die Detektive, 1929



■エーミールと探偵たち

ケストナー少年文学全集 1 定価三五〇円

一九六二年七月十八日 第一刷発行◎

一九七〇年八月十日 第十刷発行

訳者 高橋健二

発行者 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

岩波雄二郎

印刷者 東京都新宿区市ケ谷加賀町一ノ三

高橋武夫

発行所 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

株式会社岩波書店

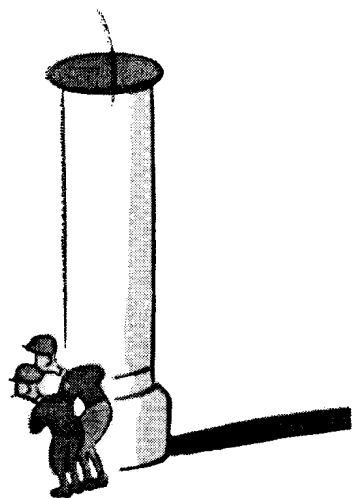
本文用紙 北越製紙株式会社

表紙用クロス 日本クロス工業株式会社

本文印刷 大日本印刷株式会社

製本 株式会社三水舎

表紙・箱印刷 錦印刷株式会社



エーミールと探偵たち

ケストナー少年文学全集 1

ケストナー作

高橋健二訳

岩波書店

EMIL UND DIE DETEKTIVE

by **Erich Kästner**

1929

This book is published in Japan by
arrangement with Atrium Verlag A. G., Zürich.

も
く
じ



エーミールと探偵たち

エーリヒ・ケストナー作
高橋健二訳

話はまだぜんぜんはじまらない……………9

十まいの絵が説明する……………22

第一章 エーミールは洗髪の手伝いをする……………43

第二章 イエシユケ警部補はだまっている……………52

第三章 いよいよベルリンへ……………58

第四章 猛烈な競走のおこなわれる夢……………66

第五章 エーミールはまちがった駅でおりる……………75

第六章 市電一七七番線……………83

第七章 シューマン街では大さわぎ……………92

第八章 警笛の少年があらわれる……………98

第九章 探偵たち集合……………108

第十章 タクシーを追いかける……………119

第十一章 スパイがホテルにしのびこむ……………130

第十二章 緑色の服のエレベーター・ボーイが正体

をあらわす……………138

第十三章 グルントアイス氏に名譽の護衛……………147

第十四章 ピンにも、とりえがある……………156

第十五章 エーミール、警視庁を訪問……………165

第十六章 刑事係り警部がよろしく……………181

第十七章 ティッシュバイン夫人はひどく興奮する……………191

第十八章 何か教訓になることは？……………203

訳者のあとがき……………209

さし絵
ワルター・トリヤー

エーミールと探偵^{たんでい}たち

高^{たか}橋^{はし} 健^{けん}二^じ 訳^{やく}
エーリヒ・ケストナー^{きと} 作^{さく}

話はまだぜんぜんはじまらない

みなさんに、わたしはほんとにおちついていうことができます。エーミールのことは、わたし自身に思いがけず、やってきたんだって。ほんとうは、ぜんぜん別な本を書くつもりだったのです。その本の中では、ただもう恐ろしさのあまり、トラが歯をガタガタいわせ、ナツメヤシがヤシの実をガラガラいわせるはずでした。そして、サンフランシスコのドリンクウォーター商会に歯ブラッシをとりに行くために、太平洋を横ぎっておよいで行った、黒と白のごぼんじまの小さい人食い人種の少女は、ペータージョーリエという名にするはずでした。もちろん、姓はなくて、名まえだけです。

ほんものの南洋小説を、わたしは計画していました。そういうのを、みなさんはいちばんよろこんで読むものだ、大きなほほひげをたらしている紳士がわたしに話したからです。

初めの三章はもうできあがってさえました。「速達便」というあだ名の酋長ラーベンアースは、焼きたての焼きリンゴをたまの代わりにこめたナイフの安全装置をはずし、心をしずめて、ねらいをさだめ、できるだけ早く三百九十七までかぞえました……

急にわたしは、クジラに足がなん本あるか、わからなくなりました！ わたしはながながと、床にねそべりました。そうすると、いちばんよく考えられるからです。そして、考えました。

が、こんどはだめでした。百科事典をめぐってみました。まず、クジラ(Walfish)のWの巻を、それから、念のため、さかな(Fisch)のFの巻も。どちらにも、ひとつとも書いてありません。しかし、さきを書くためには、正確に知らなければなりませんでした。それどころか、あくまで正確に知らなければなりませんでした！

なぜなら、もしちようどそのところに、クジラがへんな足で原始林の中から出てきたとしたら、「速達便」というあだ名の會長ラーベンアースだって、クジラに命中させることはできなかったでしょうから。

そして、もし彼が焼きリンゴのたまをクジラに命中させることができなかつたら、ペーター・ジョリエという名の、白黒のごばんじまの小さい人食人種の少女は、ダイヤモンド洗鉢婦のレーマンに、一生会うことができなかったでしょう。

そして、もしペーター・ジョリエが、レーマンのおかみさんに会わなかつたとすると、貴重な商品切手をもらうことができなかったでしょう。まあたらしい歯ブラッシをただでもらおうと思ったなら、その商品切手をサンフランシスコのドリンクウォーター商会に見せなければならな

かったのに。そうです、そしてそれから……

わたしの南洋小説は——たいそう楽しみにしていたのに！——こういうわけで、いわばクジラの足でつまずきました。みなさんはわかってくれると思います。わたしはとて残念でした。フィードルボーゲン嬢は、わたしがその話をする、もうすこしで泣きだしそうになりました。しかし、彼女は、ちょうど夕食のしたくをしなければならなかった、ひまがなくて、泣くのはあとにのばしました。そのうち、泣くことを忘れてしまいました。女って、そんなものです。

その本は、「原始林のペータージョーリエ」という題にするつもりでした。なんとしやれた題じゃありませんか。今は、その初めの三章はわたしのうちのテーブルの足の下にあてがわれています。テーブルがガタガタしないように。でも、それは、南洋を舞台とする小説にとって、ふさわしい役わりでしょうか。

ときどき、わたしはじぶんの仕事について、ボーイがしらのニテンフールと話しますが、彼はその数日後わたしに、いったい下の方に行ったことがあるんですか、とたずねました。

「下の方って、どこかね？」

「そら、南洋や、オーストラリアや、スマトラや、ボルネオなんかですよ。」

「行ったことはないよ。」とわたしはいいました。「いったいどうして？」

「だって、見て知っていることについてでなきゃ、書けないからですよ。」と彼は答えました。

「だが、はばかりながら、ニールフールくん！」

「そりゃ明々白々ですよ。」と彼はいいました。「この店にいらっしゃるノイゲバウアーさんのお宅に、女中さんがいたことがあるんですが、この女中は、鳥を焼くのを見たことがなかったんです。このまえのクリスマスに、ノイゲバウアーおくさんは、ガチヨウを焼くようにいつけて、そのあいだに買い物に出かけ、もどってきてみると、たいへんなことになっていました！ 女中は、マーケットで買ったままのガチヨウをフライパンに入れたんです。毛を焼きもせず、腹をひらいて、はらわたを取りだしもしないで。——そりゃ、とてもひどいにおいがしたんです。ほんとの話ですよ。」

「へえ、それで、」とわたしは答えました。「きみはまさか、ガチヨウを焼くのと、本を書くのとは、同じことだというんじゃないだろうね？ どうかあまり悪くとらなくてくれたまえ、ニールフールくん。だが、ぼくはいそいでちょっと笑わずにはいられないんだ。」

彼は、わたしが笑いおわるまで、待ちます。もちろんそれはそう長くはかかりません。そこで彼はいいます。「先生の南洋だとか、人食い人種だとか、サンゴ礁だとかいうのは、つまり先

生のガチョウです。そして、小説はつまり、先生が太平洋やペータージーリエやトラを焼こうとなさるフライパンですよ。そういうやっかい物を焼く方法をまだごんじないとすると、えらいにおいになりかねませんよ。ノイゲバウアーさんとこの女中さんのばあいとまったく同じように。」

「だって、たいていの作家はそうやっているさ！」とわたしは大きな声でいいます。

「おいしくめしあがれ！」彼はそういっただけです。

わたしはしばらく考えてみます。それから、また話をはじめます。「エーテンフールくん、きみはシラーを知ってるかい？」

「シラーですって？ あ森の城ビル会社の倉庫管理人をしているシラーのことですか。」

「そうじゃないよ！」とわたしはいいました。「作家のフリードリヒ・フォン・シラーのことだよ。百年以上まえにたくさんの劇を書いたシラーだよ。」

「ああ、そうですか。あのシラーですか！ たくさんの銅像になっている！」

「そのとおり。彼は、スイスを舞台とする劇を書いた。『ウィルヘルム・テル』というのだ。昔は学校の生徒はしょっちゅう、それについて作文を書かされたものだ。」

「わたしたちも。」とニーテンフールはいいます。「テルなら、わたしだって知ってますよ。」

すばらしい戯曲きよくです。ほんとうに。そりゃ、シラーならではと、みとめざるをえません。まったくそのとおりです。ただ、作文きくぶんはやりきれませんでしたよ。一つの作文きくぶんは今だっておぼえますよ。『テルは、リングをねらった時、なぜふるえなかったか』というんです。その時は、5点てんという最低点さいていてんをもらいました。だいたい、作文きくぶんはいつもわたしのにがてでした……」

「わかったよ。こんどはぼくにしゃべらせたまえ。」とわたしはいいます。「いいかい。シラーは一生いっしょうのあいだ一どもスイスに行ったことがないが、ウィルヘルム・テルの劇げきは、実際じっさいとびつたり合っているんだ。」

「そりゃ、書くまえに、料理りようりの本を読んだんですよ。」とニーテンフュールはいいます。

「料理りようりの本だって？」

「もちろんです！ それになんでも書いてあったんです。スイスの山々はどのくらい高いか。雪はいつとけるか。四林湖しりんこにあらしがおこると、どんなふうであるか。農民のうみんたちがゲスラー総督そうとくに革命かくめいをおこした時、どういうふうであったか。」

「それはたしかにきみのいうとおりだ。」とわたしは答えこたえました。「シラーは実際じっさいそのとおりにやった。」

「それごらんなさい！」とニーテンフュールはいい、ナプキンでハエをたたきます。「先生だっ

て、そのとおりにやって、書くまえに本を読んだら、もちろん、オーストラリアを舞台にカンガルーの話を書くことができますよ。」

「そんなことをする気はないよ。金があったら、出かけて行って、なんでもよく見てくるよ。」

今すぐにでも！　だが、本を読むなんて……」

「それなら、わたしがすばらしい知恵をかしてあげますよ。」と彼はいいます。「いちばんいいのは、先生の知ってることを書くことです。つまり、地下鉄とか、ホテルとか、そんなものについて書くんです。それから、毎日あなたの鼻のさきをかけまわっている子どものことを書くんです。昔はわたしたちも子どもだったんですから。」

「だが、大きなほほひげをはやしていて、子どものことなら、何から何まで知っていたでれませんが、そんなのは子どもによろこばれないっていったよ！」

「ばかばかしい！」とニーテンフルくんは不服そうにいました。「わたしのいうことを信用なさいよ。なんていっても、わたしにも子どもがあるんですから。男の子がふたりと、女の子がひとり。毎週わたしの休みの日に、この店でおこったことを子どもらに話してきかせる、たとえば、お客さんが食い逃げした時のこととか、ほろよいきげんのお客さんがタバコ売りのボーイの横つらに一発くらわそうとして、まとははずれ、たまたま通りかかった上品な